

観自在

弘長寺寺報
第三十号
平成二十七年
新春(年
二回発行)

慶びに心躍ります！

耐震修改築事業 二月集金にて全完了です

弘長寺住職 森田裕光

あけましておめでとございます。

平成二十七年の幕が開きました。

やっとその日が近づいてまいりました。

長い 本当に長〜い五年でございました。

ついに本年二月の二十回目の集金をもって全ての本堂耐震修改築事業が完了となります。

集金を始めた当初は この大事業を坐折せず順調に進めることが出来るのだろうか 本当にこの資金で大丈夫であろうかなどの不安に満ちたスタートでございました。

果たして 大事業であるが故に諸問題が勃発 その都度建設委員・地区委員皆さまの叡智による解決策を得て 何とか今日ただ今を迎えるに至りました。

多大なご喜捨を賜りました全お檀家皆様のご理解とご協力には有り難さにいくら頭を下げてでも下げ足りない思いでございます。誠に誠に有り難うございました。

また集金を担当された地区委員皆さま方には「また集金か」と憂鬱に思われながらの煩わしく大変な業務であったことは想像に難くありません 深く深く感謝申し上げます。

しかしそのお陰をもって数百年に一度の大事業が無事完了とな

り 多数の宗侶の方々に慶賀をいただきながら 住職の結制修行に併せて大落慶法要を営むことが叶いましたこと 感謝しても感謝しきれぬものではありません 誠に誠に有り難うございました。

今 その見事に修改築された段付き本尊き銅板屋根が赤色から黒色に変わってきたのです。

庫裡・阿弥陀堂両サイドの赤い屋根に対して黒がビシッと見事に映えて 何ともいえぬ落ち着きが加わって荘厳さが増してまいりました。

弘長寺のご本尊様はじめ諸仏諸菩薩様 歴代住職様 そして阿弥陀堂(位牌堂)においてになるお檀家様の先祖代々諸精霊様方が どんなにかお喜びになつていらつしやることでしょう。



美作 御誕生寺

昨年10月23日 護持会研修は 他宗派寺院研鑽として 岡山県美作の浄土宗開祖法然上人様の御誕生寺と 有名な日蓮宗の最上稲荷へ参拝をいたしました 二十二名参加

本堂修改築の 献志完納の年を迎えて

弘長寺護持会
会長 武田民三

あけましておめでとうござ
います。

今年も元旦から三ヶ日、私
暁に営まれる大般若祈祷会に、
雪道をお参りし本堂の前にあつ
て、外気とは異なる腹の底か
ら沸きあがる熱いものを感じ
ていました。

五ヶ年二十回の本堂修改築
志納金最終回を迎える正月だ
からです。

分割志納法式を始めた当初
は、集金を担当して頂く地区
委員の皆さまのご苦勞を思
うとき、一抹の不安がありま
した。

しかし、今その完
納のときを迎える運
びとなりました。

護持会員の皆さま
のご理解、ご協力は
もとより、集金業務
をお務め下さいまし
た地区委員の方々の
ご尽力の賜ものと感
謝を申し上げます。

創築二百五十年を

経た菩提寺の耐震修改築を立
派になし遂げようとの全護持
会員の皆さまの真心からなる
ご先祖さまへのご供養が結実
いたしました。

これこそが、真の祈りであ
りましょう。

祈りは、「宣(の)りであり、
求めであり、選択である。」
と教えられます。

跪いて懇願する形の祈りで
なく、『正直に、正しい目的
をもって、自分に割り当てら
れた仕事を実践することは、
そのまま一つの祈りである』
と、「続真理の吟唱」日本
教文社刊)

佛教の經典に「貧者の一灯、
王者の万灯に勝る」のことば
があります。(近ごろは金持
ちが僅かばかりの寄付をして
貧者の一灯ですが、などと
われていることも)

納金月の一ヶ月も早いと思
う頃に「年金を貰ったので、
使つてしまわんに納めさせ
てごしなはい」と申され、志
納金をご持参になる老女があ
ります。

私はいつも涙して頂くので
した。

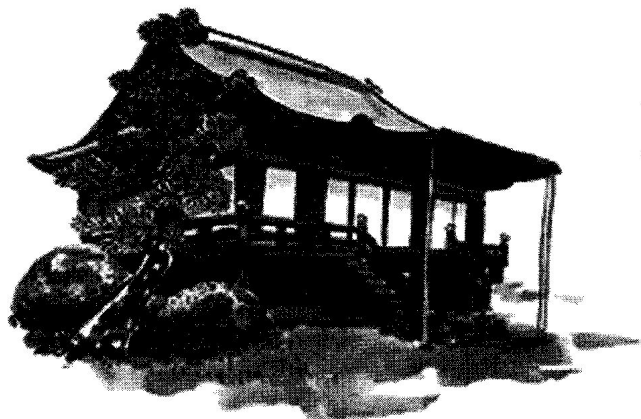
至誠をもってする「献志」
とは、この姿であると心底か
ら感動してしまいます。

『人間が地上に生を享(う)
けて来たのは、この地上でな
ければ自分の魂を磨くこと
できない特殊の條件が整つて
いるからである。魂を磨くた
め地上は人間の魂を磨くため
の生活学校である。自分の
今の生活の場が自分の魂の
修行に最も適当なこの環境に
おいて全力を尽くしている
ならば、私達は次のもつと高
な天体に生まれ変わって行く
のである。』

今、地上に生を享けてい
る限りは、身来世のことや前
世の生活のことなど考える必
要はない。この時この場にお
いて感謝しつつ、自分の仕事
にいきなり、完全に生き抜く
とあります。(『真理の吟唱』
日本教文社刊)

本堂や位牌堂の建立、修改
築の最も大切なことは、造築
物をのこすことではなく、
御先祖様への報恩感謝の心を

もつて、今生でできる魂の修
行に絶好の機会を与えて頂
いたことであらうと思つていま
す。



菩提寺が後世人々の魂の拠
り所となることを祈念し、献
志完納を心から感謝し、お慶
びを申し上げます。

又、護持会地区委員の任期
満了までに無事完納が叶いま
したことにつきまして、心
から御礼を申し上げます。

ありがとうございます。

合掌

新年を迎えて

護持会副会長

坂本 研次

皆様には、一年を振り返り万感の思いで新年をお迎えのことと思ひます。

昨年は、噴火や水害など各地で自然災害がありました。来待では、多少の天候不順があつたとは云え豊かな稔りの秋となりました。有り難いことです。



お寺は、皆さまのお力で本堂の修築をはじめ、寺域の整備がなされて以来、阿弥陀堂と共に一層荘厳で安らぎの菩提寺となりました。

大般若会やお盆の施食会等お寺の行事に、お檀家様をはじめ皆さま、折に触れてお参り下さい。

弘長寺は、開闢以来七百五十年を超える歴史の中で幾度も自然災害に遭遇したり、又戦国の世にも、多くの人々が現世の安泰と子孫長久の信仰と願をもつて懸命に法灯を今日まで護り、引き継いでいただいています。

今年、さきの戦争が終わつてから七十年になります。

長い苦しい戦争でした、多くの命が失われ、国土は焼き尽くされました。

人々は、救いの祈りを捧げながらお互いが助け合いつつ極限の世界を過ぎました。

戦後人々は、生きることのできたよろこびを感謝し、戦禍に散った人々を追悼しながら復興につとめ、今日の平和で豊かな国づくりにつなげたのです。

昨今の異常気象は、自然災害への予断を許しません。

禍のない現世の安泰と後世

が久しく平和でありますよう、お寺のご隆昌、お檀家様それぞれのお幸せを、先人の方々に感謝しながらお祈りいたし

ます。

七十にして・・・

護持会副会長

内田 松寿

合掌

七十歳を古稀という。の詩「人生七十古来稀」から取られた言葉である。

と、最近「古稀」の祝をする人が少なくなつたといふ。平均寿命が（一昨年男・八十一歳、女性八十六歳）と、これほど延びてしまつたと、七十歳を「稀」とはあ言いがたいところである。

まあ、そんなに堅いことを言わずに、お祝いは何でもたくさんすればいいと思う。

外山滋比古著『同窓会の名簿』には七十歳の友人が結婚するといふ話がある。その友人が「家内を亡くして、今年で五年です。一人で何でもやっています。気が滅入つてくるんです。それで結婚しようと思つて・・・」と言

前、外山さんはそれを聞いて、奥さんとの恋愛や結婚のことも、おめでどうを言う。

「それにしても、七十にして新妻をめとる、というのは、ロマンティックなだけではない、人間は老いてからなかなかなる、という心意気を示して命なりけり。」
これが外山さんの結びの言葉である。



まったく「命なりけり」だ。

私も古稀を迎える歳になつた。

地域社会への積極的な参加や何か人のためになる事をしたいと思つている。小・中学校の古稀祝同窓会の世話役の一人、三月に会を主催する運びになつている。

どうか今年が穏やかな良い年でありますように。

合掌

お知らせ

お願い

● 早朝坐禅に

お出かけされませんか

弘長寺の坐禅会は、毎月第一木曜日早朝六時から阿弥陀堂で行っています。

平成十六年から始めて丸々十年を過ぎました。

現在は住職・徒弟の他六名の方が熱心に参禅なさっています。男性四名、女性二名。

創設以来、二・三度体調を崩された時以外はほぼ皆勤でご参加されているのが、九十一歳の木幡氏です。

宍道から自分で運転してお出かけになるので驚きです。しかも真宗のお檀家様です。

それから遠方の妙岩寺のお檀家様が三人もいらつしやるのに、弘長寺のお檀家様は高齢の女性が二人だけという寂しさです。中々六時前までにお寺に到着することは並大抵の意志では出ることではないのですが、ご参加いただく皆さまには本当に頭が下がります。

坐禅は六時から四十分位いたします。坐蒲で足が組めない方はイス坐禅となります。

直堂（坐禅中の所作指導）は徒弟大裕が受け持ちます。

途中で十分か十五分ほど住職が口宣（坐禅にまつわるお話）をいたします。

※本堂は坐禅中のお話は坐禅の妨げとなりますので止めたいたのですが、参加者のためのご希望なので現在は続けています。

その後、本堂で読経をしてから書院にて楽しいお茶会をいたします。（これが結構楽しみになっていきます）



春夏秋冬何れの朝も清らかで新鮮な空気を体一杯に吸い込んでどつしりと安坐する、実はこんな気持ちよく心が清々しくなる贅沢な行はないと最近思うようになりました。それならばやってみようかと思われる方は、住職までご連絡下さい。さて、ここで当山の参禅者の

方達に、この寺報に寄稿をお願いしたところ、左記の原稿を頂きました。

●最初は九十一歳木幡氏です。さすがの禅問答をいただきました。

太郎・次郎 二人の話

九十一歳翁

太郎 「色即是空」

「空」の体験なんて出来やしない。

永遠の時間を一瞬に体験するなんて

次郎

出来ないことだから座つてみる楽しみがあるんだよ。

●次は弘長寺地区にお住まいの高齢の女性です。毎回、電動三輪でお越しになるベテランです。

あけましておめでとうございます。 土江栄子

武田護持会長様のお勧めで坐禅会に参加させていただいて早八年という月日が経ちました。今では行かないと損をするような気がしてなりません。それは有り難い気持ちと方丈様のお話が聴けるからです。可能な限り参加させていただきます。

●最後は岡の目地区にお住まいの妙岩寺のお檀家様です。

坐禅会に参加して

佐藤和夫



私は平成二十五年六月より弘長寺さんの坐禅会に参加しています。（月の第一木曜日）先輩に奨められて始めました。最初は早起きが苦痛でしたが、最近少し慣れてきたような気がしています。

二十代前半の頃、勤めの関係で一週間ほど缶詰でお寺に宿泊しての研修を受けた事がありましたので、坐禅そのものにはあまり抵抗がありませんでした。

坐禅の途中で和尚さんの法話があります。

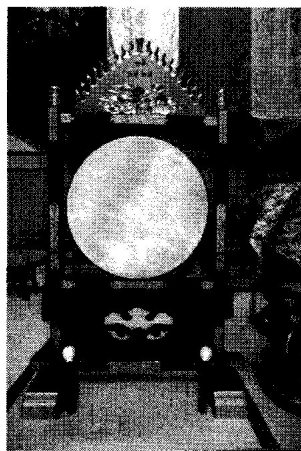
このお話が、大変珍しく、今まで体験したことのないような内容なので大変勉強になります。

まだ駆け出しですが、先輩の皆さまと共にこの坐禅を続けたいと思っています。

お知らせ

お願い

●二十九号で掲載しました楽太鼓が金具や火焰等の装飾品を付け替え、修造完了となりました。新年の大般若も立派に衣替えした祈禱太鼓から勇ましい音が鳴り響きました。



●葬儀には大裕を必ず役僧につけます、又四十九日も大裕と二人で修行いたします(再掲載)

●大裕を間もなく副住職にいたします。副住職になれば葬儀の導師も可能となります。

●葬儀には大裕を必ず役僧につけます。又四十九日だけは必ず二人で参りますので、よろしくお願いたします。

●転読大般若祈禱会を行います

●本年も転読大般若祈禱会を厳修いたします。

●四月の第二日曜日です。四月十二日(日)午後二時

●法話はいつもの通り住職が行います。近づきましたらご案内いたします。是非お詣り下さいませ。

●ご法事後の仕上げの席にはつけなくなりしました(再掲載) 大変申し訳ないのですが、住職は糖尿病と診断されてしまいました。

●現在食事療法と運動で治療中のため、今後は仕上げの席は遠慮させて頂きますのでご了承下さいませ。

●本堂でのお寺詣りが終わった時点で失礼させて頂いたいただきます。又、徒弟大裕も同じく遠慮させて頂いたいただきます。

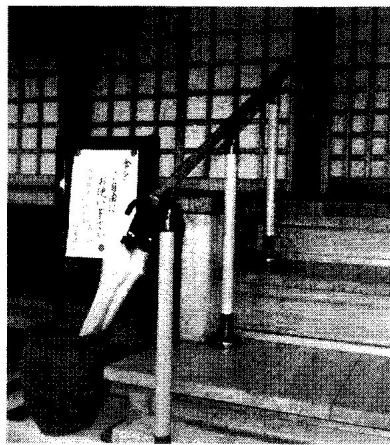
●永代供養塔について

●墓地の永代使用はお檀家様に限りませんが、永代供養塔への供養を望まれるお方は他檀家や他宗派を問いません。どなたでも結構です。

●盆棚経は昨年は全檀家を廻ることができました。

●本年も昨年通り期間を延長して(八月十二日〜二十日)全檀家を目指します。

●本堂正面階段に手すりを付けさせていただきました。本堂の正面階段で転倒された方がございますので、急遽手すりを付けさせていただきました。また、ビニール傘を数本準備しましたので、急な雨降り等にご利用下さい。



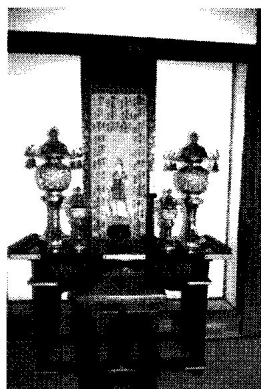
●浜・観音講から観音札所掛け軸を奉納していただきました。

●浜東地区の観音講の皆さんが、高齢化の為、講の存続が難しくなるとのこと。お祀りになつていた掛軸をお寺に奉納されました。故大聖東堂様の揮毫があります。

●世話役伊藤光範氏を中心として伊藤玲子氏、石本氏、故五百川道治氏、伊藤貢氏、伊藤保久氏、五百川佐子氏、仲田喜久子氏の八名で講を作られ大切に祀られてきたものです。

●講員皆さままで本堂にて奉納供養をしていただきました。皆さまが一心に捧まれた尊い掛け軸ですので、東序室中にお祀りさせて頂きました。

●本堂にお参りになった折には是非お手をお合わせ下さい。



●本年十月七日(水)と八日(木) いざ鎌倉ですぞ

●本年度護持会主催研修旅行は、お知らせしていたように鎌倉建長寺に参拝いたします。

●当山開基藤原満資公の主君である北条時頼公の菩提寺であります。

●どんな研修成果が出るのか今から楽しみです。

弘長禪寺研修旅行

十月二十三日好天に恵まれて他宗寺院研修旅行に出かけました。

岡山県美作にある法然上人様の御誕生寺へ参拝、法話をいただいた執事和尚様の多弁に一同腹を抱えて笑いました。

どこの宗派にも口から生まれ出たような方がいるものだと感心しました。

御誕生寺にて本尊上供法要



宗派は違えど同じ仏教なので、親戚に来たような感じで時間を過ごしました。

美作を出て日蓮宗最上稲荷へ参拝、会館で昼食をとり、ご祈祷をしていただきました。

一応研修旅行ですから、バス車内で宗派の違いについて住職がお話をしました。

○「浄土宗と浄土真宗は同じ他力本願で同じ南無阿弥陀仏

抱腹絶倒の法話を賜る



なのにどこが違うのか？

親鸞様はたとえ地獄に落ちても永遠に法然様のお弟子でいるのだと仰っていたのに、親鸞様が亡くなった後、その遺言に背いて、お弟子さん達が新しく浄土真宗という宗派を作ったのは何故か？」

○禅宗各宗派の違いについて

本寺報で「住職は考える」に載せている内容をお話して車内研修といたしました。

御誕生寺

葬儀もできる立派な会館でした



大型バスで二十二名はゆつたりの車内



最上稲荷妙教寺にて



住職は考える ①

禅を紐解いてみる

住職

昨年暮れと正月に二回、山陰中央新報に私の顔写真が載りました。

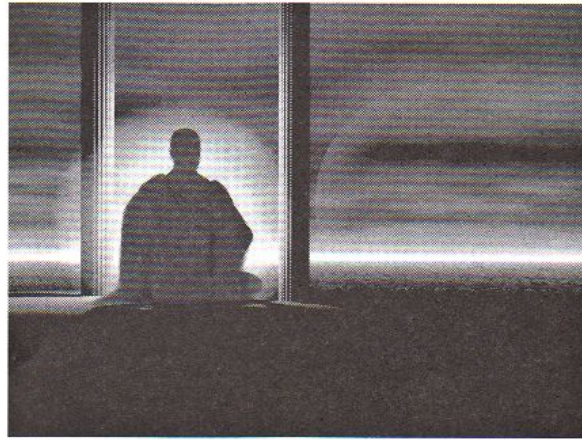
中央新報文化講座「禅のころ」の講師を担当せよとの中国管区教化センターからの依頼によるものでありました。

勉強させていただく有り難い機会を頂戴いたしました。講師としてではなく私の方が共に研鑽させていたたく生徒の気持ちで取り組みたいと思います

素晴らしい企画なので一般市民向けの文化講座となれば、拙寺坐禅会のよな曹洞宗のお檀家様とは限らない、種々の方々の集まりであるから難しい。

「曹洞宗の講師だから曹洞禅を学びたい」という方も中にはおありだろうが、恐

らく禅宗各宗派の差異などに頓着せず「禅ってなんだろう」「何かブームのようだから体験してみたい」という初心の方のほうが多いのではないかと思います。



そういう方達にいきなり核心に迫る曹洞禅とか高祖禅を説いても難解過ぎるのではないかと思いました。(勿論、坐禅の作法そのものは最初に指導せねばなりません)

そこで私なりの解釈で、いきなり中へ切り込まずに「仏教のなかで禅のスタンスは？」仏教とは・宗派と

は・禅とは？という外堀攻めの概要説明から入った方が理解しやすいのではないかと考えました。

私が書くこの文章は一寺院の「寺報」だからお載せすることが可能です。

あくまで住職一人の考えであり、他の宗侶とは信仰に対する考え方が異なっている可能性ありやとも思っています。

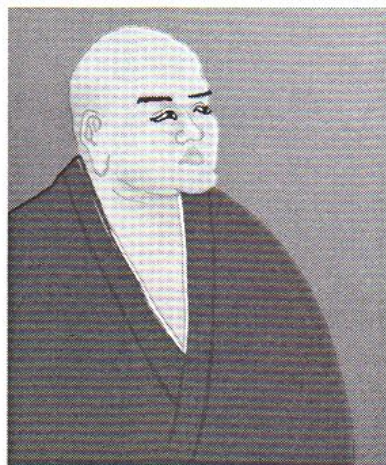
公の機関誌等には掲載しようと思わない内容も含まれています。禅宗を代表して講習するのですから勿論文化講座でも話せないこともあります。

しかし、弘長寺を菩提寺とするお檀家様には、何事も隠さずに住職の思索をそのままお伝えしたいと思っています。

忌憚なく言えば禅は仏教の中ではマイナーな存在だと思います。教えにしても修行にしてもすこぶる難解です。

曹洞宗一万五千カ寺、臨濟宗・黄檗宗併せて五五百カ寺、総計禅宗二万カ寺以上とはいふものの、それは禅の力で大教団となったのではありません。寺院数イコール坐禅の布教力ではないのです。

坐禅とは無縁の葬祭・先祖供養の力と、併せて徳川幕府の寺請制度(檀家制度)のお陰で巨大になったのです。



道元禅師

三代目の義介禅師が中国で学び、祈祷・葬祭・法事を導入され、四代目の螢山禅師がそれを受け継ぎ、弟子を多数育成して全国に広められたので今日の大教団があるのです。それを誤解してはなりません。(義介

住職は考える ②

禅師は永平寺を出て大乘寺へ、そしてその弟子螢山禅師は總持寺を開かれました)

勿論他宗派の寒行や荒行・千日回峰行などによる僧侶の修行力が尊崇されるように、道場に数年籠もり坐禅修行して住職となる禅宗僧侶の修行力があるからこそ「ウチの和尚さんは有り難い」となるのかもかもしれません。

しかし、だからといってお檀家様がござって坐禅修行は素晴らしいと目覚め、発心するきっかけになどってはいないのです。



開祖道元様の純粹な坐禅は永平寺三代(義介)・永平寺四代(義演禅師)までで、一旦本山永平寺が途絶する歴史を持つほどの難解・困難なものです。

以前にも書いたように曹洞宗は四代目を永平寺の義演禅師ではなく總持寺を開かれた螢山禅師として法脈としています。

その坐禅修行というのは、お釈迦様の悟りを追体験して仏となる行でございます。

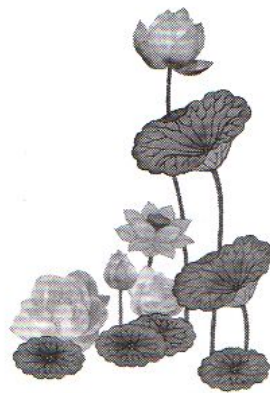
しかしお釈迦様自身は悟られた後では坐禅に重きを置かれませんでした。

それは第二十八号で述べた通りです。

もし重きを置かれていたならば、十大弟子の中に坐禅第一と称される弟子がいないなどということは全く考えにくいからであります。

禅宗には曹洞禅と臨濟禅がございます。黄檗禅は基本的に臨濟禅です。

江戸時代に当時中国で流行していた臨濟宗の公案禅(坐禅中に問答を考える)に念仏を加えた禅を隠元禅師が日本に持ち込まれたのが黄檗宗ですが、臨濟中興の祖である白隠禅師は、正当な禅ではないと決してそれを認めようとはされませんでした。

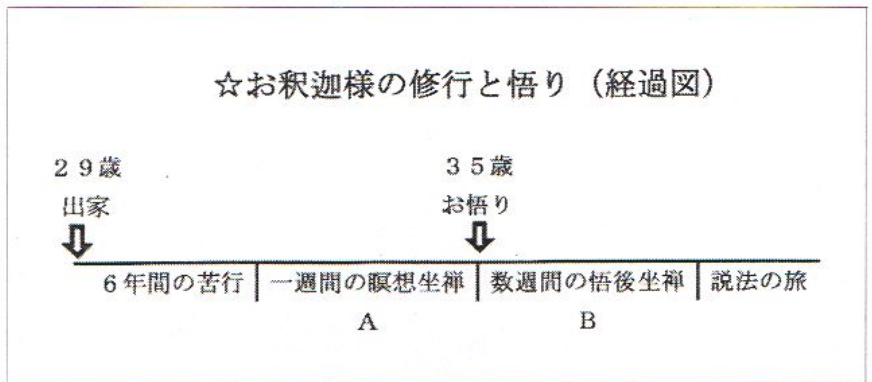


ですから大きく分ければ禅宗は曹洞禅(黙照禅)と臨濟禅(看話禅)ということができます。

この二つは昔から坐禅作法は無論のこと、目指すところが全く違うので仲が余り良くないのです、というよりは相手の思想を許容できないのでお互いに無視をしているのです。

ではこの二つがどのように違うのかを図で示しましょう。

☆お釈迦様の修行と悟り(経過図)



「Aの領域が臨濟宗の坐禅、Bの領域が曹洞宗の坐禅となります。

Aはひたすら瞑想により悟りを目指す坐禅で、Bはもう悟った後なので悟りを目指しません、ただ只管(ひたすら)坐るだけ。」

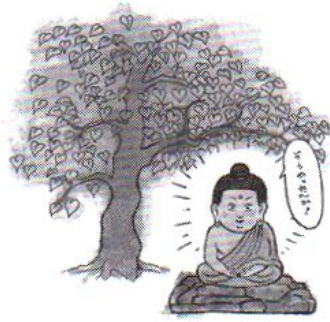
お釈迦様は、人間世界には何故四苦八苦という苦しみが

住職は考える ③

多く、最後は何故死が待ち受けているのかとの難題を思索している時に修行者(比丘)に出会い、憧れて出家されました。

そして五人の修行者と共に自分の体を痛める苦行をされました。(命と隣り合わせになるほどの苦行ではなかったようだと駒大名誉教授の奈良康明先生は書いておられますが)

しかし苦行では悟りを開けぬと気付かれ、菩提樹下にて坐禅をされました。



そして七日間の瞑想坐禅の末、八日目の朝、明けの明星がキラッと輝いた時に忽然とお悟りになりました。

この七日間の瞑想坐禅Aを

目指しているのが臨済宗です。

お釈迦様はお悟りを開かれた後、「何という素晴らしい境涯だ、こんな境涯があったのか」とお悟り後の素晴らしい境涯の坐禅を数週間楽しんで坐禅をされたとのこと。

この悟った後の素晴らしい境涯の坐禅Bを目指しているのが曹洞禅です……などと安易に説明してはなりません。実はそこには本当は深い問題があります。

お釈迦様がお悟りを開かれたのですが、そのお悟りの内容や状態はお釈迦様でなければ誰も知る由がありません。

曹洞宗も臨済宗もお釈迦様の苦行を軽視して、(否定して)いきなり坐禅に焦点を合わせているのですが、お釈迦様はこの六年間の苦行の裏打ちがあったらばこそその悟りではなかったのではないかと思えるのです。

苦行なしで坐っただけでは

お釈迦様といえどもいきなり

悟りに至ることは無かったのではないか、長い苦行期間があればこそ機が熟したのではないか。

臨済禅はAなのですが、これはお釈迦様の瞑想の期間です。

どのような脳状態・心理状態の経緯で、どのような論理立てで悟りに至られたのか、その瞑想の中身はお釈迦様以外誰も知る由がないのです。

禅宗ではお釈迦様がお悟りを得られた時、「山川草木悉皆成仏、我と大地と同時に成道す」と勝手に解釈しているのですが、真実は不明です。



そもそもお釈迦様の肉声による正しい言葉や真の教えがないのですから。

お経だって三百年から五百

年の間、文字として残さず、弟子から弟子へ口伝えで伝わった事を三百年後に文字化したものだから。

多分こうではないかとお釈迦様の瞑想内容を問答形式(公案)にして悟りへの体系造りをなされたのが臨済禅なのですが、全て想像の域を出ない公案の坐禅なのです。

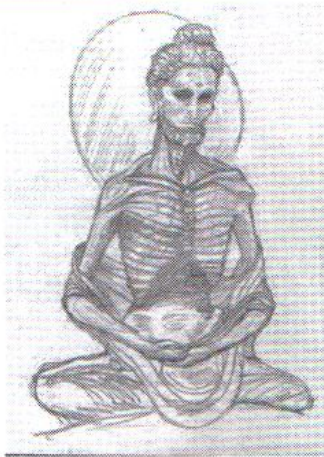
(現在日本臨済宗の公案体系を確立したのは白隠禅師です。この方がまたすさまじい方で、曹洞禅を徹底的に批判されました。白隠禅師については後ほど触れたいと思います。)

Bの曹洞禅にしても、修行と悟りは同じだ(弁道話:修証是一等なり)として、坐れば(修行)そのままが仏であり、悟りだという解釈なのですが、苦行・瞑想・悟り体験無しでいきなりBの素晴らしい境涯の坐禅に至るといふのは無理があるのではないでしょうか。

もしBではなくAの状態のままでも苦行も瞑想も否定し、臨済禅と違って何も考えずにただ坐るだけで悟りだ・仏だ

住職は考える ④

というのであれば、お釈迦様の坐禅・お悟りとは全く異質なものであるような気がします。つまりは道元様がこれでのいいのだと仰ることを頭ごなしに信じるしかありません。



この点を臨済宗は「曹洞宗さん、あなた方は悟りを求めない禅だと言って何も考えずに坐っておられるが、それって居眠り禅ではないの？」と揶揄されます。

曹洞宗は曹洞宗で「臨済宗さん、あなた方は公案問答を用いて悟りに導くと仰るが、公案というのは本当にお釈迦様のお悟りに導く正しい行程なの？正しいという根拠って何？そもそも問題を出す道場のお師家さん（先生）って本当に悟ってるの？それは野狐禅ではないのですか？」野狐禅（やこぜん）とは野狐（のぎつね）の禅：つまり狐

は人を騙す生き物だから、本当は悟ってもいないのに悟ったふりをしてしている禅ではないのかと揶揄するのです。だからお互い余り仲がよいとはいえません。

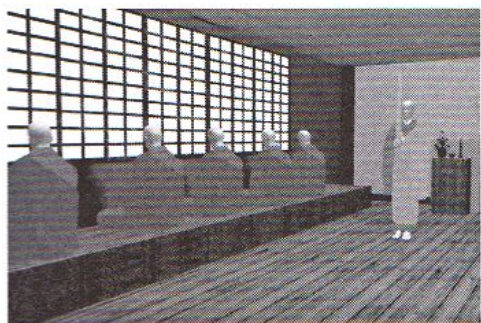
じゃあ私自身はどちらの禅が良いと思っているかと問われれば、「私はA Bどちらも良いと思っています」、だってどちらもお釈迦様が辿られた道ですもの。どちらの言い分もよく理解できます。

ではどちらが難解かといえ、それは圧倒的に曹洞禅の方ですよね。

だって目的の無い修行ほど難しいものではありませんから。公案禅は、この問題が解決してから次に行こう、となり、ステップを踏みながらゴールを目指すことができませんが、曹洞禅は「何も考えず意識を覚醒したままで坐禅することがゴールだ」「悟りたいとか心を磨こうなどの目的を持ってはならぬ」というのです。終着点はおろか、経由点もないという、かように難しい

坐禅はないのです。

考えてみれば日本の各宗派も、これぞ絶対お釈迦様が示された仏法だと確信できるものはないということなんです。だってお釈迦様が自分自身の口から、「私の教えは南無阿弥陀仏と念仏を唱えることだ」とも「南無妙法蓮華経と唱えることだ」とも「印を組んで真言を唱えることだ」とも仰った訳ではないのですから、全て各お祖師様方の創作であり、それに随うしかないのだろうと思います。



余談ですが、曹洞宗の修行道場では作務（労働）疲労・睡眠不足の為、猛烈に睡魔が襲う中での坐禅なので居眠り

になりがちです、また逆にこの居眠りがなんともいえず心地良いのです。直堂（禅堂内を警策を用いて居眠りする坐禅者を策励する役）による痛棒を受けることがわかっていても居眠りが勝る時があります。

曾て眼蔵会（道元様の正法眼蔵の講義を受け、坐禅をする研修会）にて「正身端座は安楽の法門じゃ、居眠りをしとつても坐禅にはならんぞ」と講習された講師様を坐禅中にチラツと覗いたら、しっかりと船を漕いでおられた。

これぞ安楽の法門なりと納得したこともあります。

この居眠りが、如何せん坐禅にとつては魔障なのでございます。

内山興正老師が面白いことを仰ってます。

坐禅中の居眠りは、自動車の居眠り運転同様に居眠り坐禅だ、考え事運転も生命が凝つてしまうのでこれも危ない。

生き生きと覚めて安全運転でなければならぬ。

次号に続く